

中国古典文学大系 35

平凡社

金瓶梅下

笑笑生作 小野忍・千田九一 訳

訳者紹介

小野 忍^{しのぶ} 明治39年東京生。東京大学文学部支那文学学科卒。専攻 中国文学。現職 和光大学教授。訳著書「李家荘の変遷」(岩波書店)「腐蝕」(岩波書店)「現代の中国文学」(毎日新聞社)「中国文学雑考」(大安) 現住所 東京都杉並区桃井2-9-9

千田九一^{ちたくい} 大正元年山口県生(昭和40年歿)。東京大学文学部支那文学学科卒。専攻 中国文学。元東京都立大学講師・京華高等学校教諭。訳著書「巣の中の蜘蛛」(宝雲舎)「東海巴山集」(岩波書店)

中国古典文学大系 全60巻

金瓶梅(下)

第35巻

昭和44年2月5日 初版発行

昭和48年4月20日 初版第5刷発行

定価 1500 円

訳者との申
合せにより
検印を省略
いたします

訳者 小野 忍
千田 九一
東京都千代田区四番町4番地
発行者 下 中 邦彦

発行所

郵便番号 102
東京都千代田区
四番町4番地
振替・東京29639

株式
会社

平 凡 社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© 株式会社 平凡社 1973

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

0397-312351-7600

金瓶梅(下) 主要人物一覽

西門慶（シーメン・チン）山東省清河県の薬種商の二代目。のち、質屋

や糸屋を開くなど商売の手を広げる一方、首都東京（開封）の宰相蔡京に渡りをつけ、この県の提刑所（警察・裁判をつかさどる役所）の

理刑（副長官）という官職を与えられ、のち提刑（長官）に昇進。

呉月娘（ウー・ユニアン）西門慶の正夫人。後妻。呉千戸の娘。

李嬌児（リー・チアオアル）西門慶の第二夫人。もと廓の芸妓。

孟玉楼（モン・ユロウ）西門慶の第三夫人。もと呉服商の未亡人。西

門慶の死後、李衙内に嫁ぐ。

孫雪娥（スン・シェオ）西門慶の第四夫人。もと西門慶の娘の小間使

い。下男の女房たちを指図して炊事を受け持つ。

潘金蓮（パン・チンリエン）西門慶の第五夫人。もと仕立屋の娘。売ら

れて大家の小間使いにされ、のち武大に嫁がされたが、西門慶と通

じて、夫を毒殺、西門家にはいる。

李瓶児（リー・ビンアル）西門慶の第六夫人。もと梁中書の妾。のち、

清河県出身の花太監（宦官）によって、その甥花子虚の正室として

迎えられ、花太監の帰郷に従って、夫とともに西門慶の隣に移り住

んだが、西門慶と通じ、夫の死後、西門家にはいる。

春梅（チュンメイ）潘金蓮づきの女中。もと呉月娘づきの女中。きか

ぬ気の娘。のち、周守備の妾、次いで正妻。姓は龐（パン）。

秋菊（チュチュ）潘金蓮づきの小女。炊事係。

玉簫（ユーシアオ）呉月娘づきの女中。

小玉（シアオユ）呉月娘づきの小女。

蘭香（ランシアン）孟玉楼づきの女中。

小鸞（シアオルアン）孟玉楼づきの小女。

迎春（インチュン）李瓶児づきの女中。

绣春（シウチュン）李瓶児づきの小女。

陳經濟（チュン・チンチー）西門慶の婿。都の大官楊戩の親類。のち、

妻とともに西門家に寄寓し、西門質店を預かる。

西門のお嬢さん 西門慶の娘。陳經濟に嫁ぐ。

玳安（タイアン）西門慶の小者。おませ。

平安（ピンアン）西門慶の小者。門番。

画童（ホワトン）西門慶の小者。

琴童（チントシ）孟玉楼が連れて来た小者。潘金蓮と密通して西門

家を追われる（第十二回）。のち、李瓶児が連れて来た小者天福（テ

インフル）を琴童と改名（第二十回以降）。

書童（シュートン）西門慶が役人になったとき、県知事から贈られた

小者。蘇州生まれの美少年。

棋童（チートン）西門慶が役人になったとき、新たに買い入れた小

者。

来保（ライバオ）西門慶の下男。都への使者の役を受け持ち、のち、

宰相蔡京によって校尉という官職を与えられる。

惠祥（ホイシアン）来保の妻。

来旺（ライワン）西門慶の下男。江南の織物を買付けける役を受け

持つていたが、のち西門慶に謀られて郷里へ追放される。

宋惠蓮（ソン・ホイリエン）来旺の妻。夫の留守中、西門慶と通じる。

夫が追放されたのち、自殺。

来興（ライシン）西門慶の下男。

惠秀（ホイシウ）来興の妻。

来昭（ライチャオ）西門慶の下男。

一丈青（イーチャンチン）来昭の妻。名は惠慶（ホイチン）。

小鉄棍（シアオティエクン）来昭の息子。

来爵（ライチュニ）応伯爵の口ききで雇い入れた下男。

元(ホイユアン) 来爵の妻。

傳番頭 本名は傳銘(フー・ミン)。西門薬舗に古くからいる番頭。

實地伝(ベン・ティチョワン) 西門慶の番頭。通称は貫四(ペン・スー)。

吳典恩(ウー・ティエンオン) もと西門慶の番頭。のち、宰相蔡京によ

つて駅丞という官職を与えられる、のち巡檢に昇進。

韓道国(ハン・タオクオ) 西門系店の番頭。

王六兒(ワン・リウアル) その妻。のち、西門慶と通じる。

王経(ワン・チン) 王六兒の弟。

李桂姐(リー・コイチエ) 廓の芸妓。李嬌児の姪。

李銘(リー・ミン) 楽師。李嬌児の弟。

吳銀児(ウー・イル) 廓の芸妓。もと花子虚の傭い者。

吳惠(ウー・ホイ) 楽師。吳銀児の弟。

鄭愛月(チョン・アイユエ) 廓の芸妓。

鄭奉(チョン・フォン) 楽師。鄭愛月の兄。

応伯爵(イン・ボーチュエ) 西門慶の取巻き。西門慶のいちばんのお氣

に入。通称は応二(イン・アル)。あだ名は「花子(ホワツ)」、すな

わち「こじき」。

謝希大(シェ・シーター) 西門慶の取巻き。通称は謝大(シェ・ター)。

吳大舅(ウー・ターチウ) 吳月娘の長兄。親譲りの千戸の職に就いてい

る。名は鑑(カイ)。

花大舅(ホワ・ターチウ) 李瓶児の先夫の長兄。

楊おば 原名は楊姑娘(ヤン・クニアン)。孟玉楼の先夫の父の妹。

張四(チャン・スー) 孟玉楼の先夫の母の弟。

武大(ウー・ター) 潘金蓮の先夫。蒸し餅売り。ちんちくりんのぶ

おとこ。

武松(ウー・ソン) 武大の弟。武二郎、武二とも呼ばれる。虎を退

治して県の巡捕都頭(治安隊長)に取り立てられた豪傑。

王婆(ワン・ポー) 武大の家の隣の茶店の婆さん。周旋屋。

薛嫂(シェ・サオ) 花かんざし売りの女。周旋屋。

馮(フォン) ばあや 李瓶児の老女中。

如意(ルイー) 李瓶児の息子官哥(クワンコー)の乳母。

夏龍溪(シア・ロンシー) この県の提刑所の提刑(長官)。すなわち、西

門慶の同僚。

劉(リウ) 太監 劉内相とも呼ばれる。都からこの県に派遣されて来

た太監(宦官)。御料の煉瓦を焼く工場(磚廠)の管理長官。内相は

宦官の敬称。

薛(シエ) 太監 薛内相とも呼ばれる。前者と同様、都からこの県に

派遣されて来た太監。御料地(皇荘)の管理長官。

翟執事 本名は翟謙(チャイ・チエン)。蔡京の執事。都にあって西門

慶のためにいろいろ便宜をはかる。のち、西門慶の仲介で韓道国の

娘を妾として迎える。

蔡蘊(ツァイ・ユン) 伏元(官吏登用試験の首席合格者) 出身の官吏。

宰相蔡京の養子。翟執事の紹介で西門慶を訪れ、互いに利用し合う

関係になる。

安忱(アン・チュン) 進士(官吏登用試験の合格者) 出身の官吏。同期

生蔡蘊に誘われて西門慶を訪れる。

宋喬年(ソン・チアオニエン) 進士出身の官吏。のち巡按(地方長官)

として山東省に赴任し、同期生蔡蘊に誘われて、西門慶を訪れる。

黃蘧光(ホワン・パオコワン) 進士出身の官吏。煉瓦工場の管理長官。

従って劉太監の同僚。同期性安忱に誘われて、西門慶を訪れる。

喬(チアオ) 大戸 西門慶の向かいの家の主人。名は洪(ホン)。大戸は

金持の意。その娘が西門慶の息子官哥と婚約する。西門慶の斡旋に

より、のち「義官」となる。

崔本（ツオイ・ベン） 喬大戸の外甥。のち西門呉服店の番頭となる。

李智（リー・チー） 李三ともいう。御用商人。応伯爵の紹介で西門

慶から資本金を借りる。

黃四（ホワン・スー） 李智の相棒。

苗青（ミアオ・チン） 揚州の富豪苗天秀の下男。主人に従って船で都

へ上る途中、船頭と共謀。主人を殺してその財物を山分けし、事件

発覚後、西門慶に賄賂を使って逮捕を免れる。

倪鵬（ニー・ボン） 秀才（官吏登用試験の受験資格を持つ者。いわば万年受

験生。夏提刑の息子の家庭教師。

温必古（ウェン・ビークー） 秀才。西門慶の祐筆。

王三官（ワン・サンコワン） 金蓮がかつて小間使いをしていた王招宣の

息子。李桂姐のなじみ客。

林（リン） 夫人。王招宣の未亡人。王三官の母親。

雲離守（ユン・リーショウ） もと西門慶の取巻き。兄雲參将（武官）が

戦病死したため、清河右衛指揮同知という官職を与えられる。

何千戸（ホー・チュエンフー） 何太監の甥。西門慶が提刑所の理刑から提

刑に昇進したのに伴って、理刑に任ぜられ、都から赴任する。

張二官（チャン・アルコワン） 西門慶の死後、その後任として提刑所の

提刑に任ぜられ、応伯爵の仲介により李嬌児を妾に迎える。

周守備（チョウ・シウベイ） 守備府（治安をつかさどる役所）の長官。

名は秀（シウ）。

周忠（チョウ・チュン） 周守備の老僕。

張勝（チャン・ション） もと廊の地まわり。西門慶の紹介によって周

守備の秘書となる。

李衙内（リー・ヤーネイ） 清河県知事の息子。国子監（いわば国立大学）

の学生。西門慶の死後、孟玉楼をめとる。

目次

主要人物一覧……………前付 三

第七十二回……………七

王三官が西門慶に義父の礼を取ること
 応伯爵が李銘をかばってやること

第六十八回……………三

鄭月児が色を売って秘密を洩らすこと
 玳安が念入りに文嫂を捜すこと

第七十三回……………六

潘金蓮が「去りにし人」に腹を立てること
 郁ねえさんが「眠れぬ夜」をうたうこと

第六十九回……………三

文嫂が林夫人に情を取り次ぐこと
 王三官がだまされて悪党の仲間入りをすること

第七十四回……………一〇

宋御史が八仙図の鼎を求めること
 呉月娘が黄氏の物語を聞くこと

第七十回……………六

西門慶が工事完了のち昇進すること
 役人たちが朱太尉に謁見すること

第七十五回……………一三

春梅が申二姐に悪態をつくこと
 玉簫が潘金蓮に告げ口すること

第七十一回……………三

李瓶児が何家で夢に現われること
 提刑官が参内して拝謁を賜わること

第七十六回……………一五

孟玉楼が呉月娘をなだめること
 西門慶が溫葵軒を追い出すこと

第七十七回 一六

西門慶が雪を踏んで愛月を訪ねること
賁四嫂が窓にもたれて佳き日を望むこと

第八十三回 二七

秋菊が恨んで内証事をばらすこと
春梅が便りを届けて逢う瀬を楽しむこと

第七十八回 一六

西門慶が林夫人と再戦すること
吳月娘が燈籠見物に黃氏を招くこと

第八十四回 二六

吳月娘が碧霞宮を大騒がせすること
宋公明が清風寨で人助けすること

第七十九回 三

西門慶が情欲のため病にかかること
吳月娘が遺腹の子を産むこと

第八十五回 二五〇

月娘が金蓮の邪恋を見破ること
薛嫂が月夜に春梅を引き取ること

第八十回 二四

陳經濟がひそかに美女をものにするこ
李嬌兒が財物をくすねて廊に帰ること

第八十六回 三〇〇

雪娥がそそのかして經濟をたたかせるこ
王婆が金蓮を高く売りつけようとするこ

第八十一回 二四

韓道国が財物を盗んで高飛びすること
湯米保が主人を欺いて恩義にそむくこ

第八十七回 三三

王婆が財を貪って報いを受けること
武都頭が嫂を殺して兄を祭ること

第八十二回 二六

潘金蓮が月夜に逢いびきすること
陳經濟が二階で両手に花を楽しむこと

第八十八回 三三

潘金蓮が守備府で夢枕に立つこと
吳月娘が勸化僧に布施をすること

第八十九回 三五

清明節に寡婦が新墓に詣でること
吳月娘がふと永福寺にゆくこと

第九十五回 四〇

平安がこっそり質草を盗み出すこと
薛嫂が威張ってつけ届けをさせること

第九十回 三七

米旺が孫雪娥をかどわかすこと
雪娥が守備府に官売されること

第九十六回 三〇

春梅がもとの家の庭や館で遊ぶこと
守備が張勝に經濟を捜させること

第九十一回 三六

孟玉楼が李衙内のもとへ喜んで嫁ぐこと
李衙内が怒って玉簪を打ちのめすこと

第九十七回 三三

經濟が守備府の事務をとること
薛嫂が商売で婚事をまとめること

第九十二回 三七〇

陳經濟が嚴州府で躓にかかること
吳月娘が官庁を大騒がせすること

第九十八回 四三

陳經濟が臨清で居酒屋を開くこと
韓愛姐が妓楼で恋人に逢うこと

第九十三回 三六四

王杏菴が正義のため貧者に恵むこと
任道士が金のため禍を引き起こすこと

第九十九回 四六三

劉二が酔って王六児をのしること
張勝が怒って陳經濟を殺すこと

第九十四回 三九六

劉二が酔って陳經濟を殴ること
雪娥が酒屋で娼妓になること

第一百回 四六四

韓愛姐が湖州の父親を尋ねること
普靜和尚が亡者どもを濟度すること

金^{きん}

瓶^{びん}

梅^{ばい}

下

千^ち小^お 笑^{しょう}

田^だ野^の 笑^{しょう}

九^く

一^い忍^{しのぶ} 生^{せい}

訳 作

第六十八回

鄭月児が色を売って秘密を洩らすこと
玳安が念入りに文嬭を捜すこと

花々しほます夜半の雪

今朝もひらひら窓の外

枝に空しく葉の緑

ゆいて帰らぬ花々よ

こしかた思い春をわぶ

武陵ははるか川の奥

笛でうらみを伝えても

東風はこちらに吹いてくる

さて、西門慶は李瓶児のために紙を焼くと、潘金蓮の部屋に帰って一晩やすみました。あくる日にはまず応伯爵の家から祝いの麴が届きました。そのあとで黄四が小舅の孫文相といっしょに、豚を殺したのを一匹、酒一壺、焼鷲鳥二羽、焼鷄一羽、果物二箱を持ってやって来て、西門慶に叩頭いたします。西門慶がしきりに辞退すると、黄四はひたすらごきげんをとってひざまずき、

「旦那さまは命の恩人、孫文相をお救くださいまして、家内一同、感激いたしております。何も差し上げるものがなく、こんなつまらないものでございますが、下々の者にでもふるまっていたきたいと存じまして、持ってまいりました。なにとぞお受け取りくださいますよ

うに」

長いことこわったのち、西門慶は豚と酒だけを受け取って、

「じゃ、これを取っておいて、錢さんにお届けすることにしよう」

「そうなりますと、わたくし、氣持が済まなくて困ってしまいますが、

やむをえませんから、料理や果物は持って帰ります」

それからたずねて、

「旦那さまはいつお暇でございましょうか。わたくし、応二さんにお

願ひして、旦那さまを廓にご招待申し上げたいと存じますが」

「あいつのでたらめを真に受けちゃだめだ。それにあなたにそんな心配をかけちゃ、おれにたのまないほうがよかったことになるぜ」

黄四とその小舅は何度もお礼をいって、帰ってゆきました。

十一月一日、この日西門慶は役所から帰って来ると、また李知事の役所へ酒を飲みにゆきました。月娘はただひとり喪服姿で轎に乗り、喬大戸の家へ、長姐の誕生祝いにまいります。午後になると、尼寺の薛尼が、かねがね月娘から、五日は李瓶児の四十九日だから、尼さんを八人連れて来て、血盆経を読んでほしいといわれていたものからです。王尼にはないしよ、贈り物を二箱買い整え、月娘を訪ねて来ました。月娘は留守なので、李嬌児と孟玉楼がこれを引き止めて、相手をいたします。

「おねえさまは喬親家のところへ、長姐の誕生祝いにいらして、お留守なの。あなた、あの人のお帰りを待ってたほうがいいわ。あの人、あなたにお話があるようだから」

薛尼はそこで腰を落ちつけます。ところで、潘金蓮はいつぞや玉簫から聞いた——月娘はこの尼さんのお水を飲んで身ごもったという話を思い出して、それに西門慶が乳母に手をつけている現在、——ひょいとこの乳母が子供を産むようなことになったら、寵愛を奪ってしま

うだらうと心配し、そこで薛尼を表の自分の部屋へ呼び込み、人に隠れてこっそり薛尼に一両つかませ、子供のお水をつくり、男の初子の胞衣を捜してくれるようにたのみました。その話はひとまずお預りといたしましょう。

晩になると、月娘が帰って来て、薛尼を一晚引き止めましたが、あくる日西門慶にそういって、五両もらい、お経料として薛尼に与えます。薛尼は大師父の王尼を出し抜き、五日になると、八人の尼さんを連れて来て、庭の数寄屋に道場をしつらえ、それぞれの入口に掛物を貼りつけて、華嚴經や金剛經を読み、血盆經をおがみ、晩には施餓鬼を行ないました。この日は、呉大舅の夫人、花大舅・応伯爵・温秀才を呼んで、お齋を食べました。尼さんたちは、楽器はあまり使わずに、ただ木魚をたたいたり、磬を撃ったりしながら、お経を読んだだけでした。

この日、伯爵が黄四の下男を連れて、招待状を持って来しました。七日に、廊の愛月の家で宴会をするから、西門慶にお越し願いたいとある。西門慶は招待状を読むと、笑いながら、

「七日には暇がないぜ。張西村の家で誕生祝いの酒を飲むことになっているんだ。あすなら、暇だがね」

それからたずねて、

「ほかに誰が来るんだい」

「ほかに誰も来やしません。あつしと李三くんがお相手をするだけなんです。それから女を四人呼んで、西廂記をうたわせます」

西門慶は黄四の下男にお齋を食べさせてかえしました。

「黄四はあの日お札になにを買って来たんで？」

と伯爵がたずねます。西門慶はかくかくしじか、

「おれはあいつのものをなんぞ受け取りやしないんだが、三拝九拝する

もんだから、豚と酒だけを受け取り、それに白雉の補子のはいった縹子二疋と、京緞二疋、それから銀子五十両を添えて、銭公にお礼をしておいだ」

「兄貴、あなたは金を十分にはお受け取りにならなかったんだから、こいつはやつこさんが儲けたってわけだ。反物四疋といえば、少なくとも銀子三十両の値打、二十両やそこらで、とてもこんな伝手がみつかるもんじゃありません。やつこさん、ずいぶんうまいことをしたもんだ。父子二人の命が救かったんだからなあ」

その日、伯爵は夕方になって帰りました。

西門慶は伯爵に、

「あすまた来てくれ」

「かしこまりました」

と、伯爵はいとまを告げて帰ってゆきます。

八人の尼さんは一更(午後八時)ごろにやつと法事をおわり、衣裳櫃を焼いて帰ってゆきました。

あくる朝、西門慶は役所へゆきましたが、ところで王尼がきのうのことを聞き知って、朝っぱらから西門慶の家へやって来、

「薛尼がお経をひとり占めして、お経料をもらってゆきました」と訴えました。月娘がとがめて、

「あなたはとうしてきのういらっしゃらなかったの。あの人の話では、あなたは王皇親の家へ誕生祝いにいらっしゃったことでしたよ」といえば、王尼、

「それは薛のあばずれのたためでございます。あいつはわたくしに日が延びて、六日にお経をあげることに申しました。お経料はあいつがみんな持っていたのでございますか」

「いまごろまで待ってももらいません。お経をあげないうちから、

お経料はみんなあの人に払ってしまいましたよ。でも、あなたのために、お布施の木綿が一疋とってあります」

月娘は小玉にいつけて、さっそくきのうの残りのお斎を並べさせ、また藍木綿を一疋与えました。王尼はくどくどと毒づいて、

「あのあばずれは、お経を印刷するとき、六奥さまからたくさんお金をまきあげたんです。もともとこのお経はわたくしたちふたりであげるはずでしたのに、あいつはそれを独り占めして……」

「でも、薛さんは、あなたが六奥さまから、血盆経のお経料を五両受け取ったっていつてましたよ。あなたはどうしてあの人のためにお経を読んであげなかったの」

「わたくしはあのかたの三十五日のとき、四人の師父がたを呼んで、ずいぶん念入りに読みましたわ」

「それならそうと、どうしてわたしにおっしゃらなかったの。おっしゃれば、わたしだってお布施を差し上げたのに」

いわれて王尼は一言もなく、しばらくもじもじしておりましたが、やがて薛尼のところへ、因縁をつけに出かけます。

皆さん、お聞きください。この尼や坊主などというやからをゆめゆめ相手にするものではありません。顔は尼僧の顔でも、心はあばずれとおなじで、六根は未だ浄からず、本性は明を欠き、戒行はまったく無く、廉恥已に喪われ、うわべは慈悲を第一としているけれども、ひたすら利欲を貪り、悪因縁も輪廻も一切おかまいなく、ひたすら目先の快楽を追い、貧家の物思う娘をだまし、富家の多情な妻をくどき、前門に施主檀那を迎えて、後門に胎卵湿化を捨て、男こしらえ、あひびきをする。

此丘も比丘尼も同じもの

仏法説くのがその役目

それが子授けなどをして

あたらず法力むだ使い

さて、西門慶が役所から帰って、食事をすませたところへ、応伯爵が早くもやって来ました。新しい緞子の帽子に沈香色の長上着、白底の黒長靴といういでたちで、西門慶にあいさつすると、

「もうお昼で、そろそろ出かける時刻ですぜ。あっちじゃなんべんも迎えるのをよこしてるんですよ。人を困らせるもんじゃありません」

「じゃ、葵軒を迎えにやることにしよう」

西門慶はそういうと、王経に、

「向かいへいつて、温先生を呼んで来てくれ」

王経は出かけるまもなく帰って来て、

「温先生はお留守でございました。お友だちのところへいらっしやいましたそうで」

すると伯爵、

「とても待つちやいられませんぜ。あの秀才どもときたら、たいした用もないのに友だちのところへいつたりして、いったが最後、いつ帰って来ることやらわかったもんじゃやない。そんなことをして、むやみにしくじってるんですよ」

そこで西門慶が琴童に、

「応二の旦那に栗毛の馬を用意してあげろ」

といいつけると、伯爵は、

「あっしは馬には乗りませんぜ。ここはあっしのいうことをおききなさい。さもないと、おおげさなことになりますぜ。あっしは一足先に歩いてゆきますから、あなたは轎でぼつぽついらっしやるんですな」

「なるほど。じゃ、あんたが先においでよ」

伯爵は手をこまぬくと、先にゆきます。西門慶は玳安・琴童、並びに四人の軍卒に、輜の用意をしてついて来るように命じ、ちょうど出かけようとしているところへ、平安が表からあたふたと二つ折りの名刺を持ってはいって来ました。

「工部の安さまがお見えになります。いまお役人がこの名刺を持って来られました。あとから輜でおいでになります」

あわてて西門慶は台所に酒と飯の用意を命じ、来興につまみものや点心を買わせて待つておりますと、しばらくして、安郎中がおおぜいの供を連れて到着し、そこで西門慶は冠をかぶって出迎えます。安郎中は、雲に驚の補子のはいった丸襟の服に、模様入りの金帯といういでたち、門をはいってあいさつがおわると、主客別れて席につきます。召使いがお茶を持って来、それを飲みおわると、久闊を叙しました。

西門慶、

「ご栄転の際には、お祝いを怠り、心にかかっておりました。先日はお手紙とご香奠を頂戴いたしました、葬儀にとりまぎれて、ご安否もお伺い申し上げず、申し訳もございません」

「こちらこそ、ご弔問にも上がらず、まことに失礼いたしました。上京の際、雲峯に知らせておきましたが、何かお供え物を送ってまいりましたか」

「はい、翟親家からもはるばる香奠を送ってまいりました」

「四泉どのは今年かならずご昇進なさいませう」

「わたくしごときふつつか者がなんで高望みをいたしましょう。……先生はご栄転あそばされて、いよいよご才腕を発揮できるというものでございます。治水のご功績は國じゅうひとしく存じ上げております」

「いや、どういたしまして。一介の貧書生がかたじけなくも蔡先生のお引き立てにより、あやまつて水利をつかさどり、運河を修理いたすことと相成りましたが、なにぶんにも民は窮乏し、財も尽きておるおりからで。……さきごろはご用船で花石を運搬して、水門をこわし、堤防をいたため、沿道はみなみなたいへんな苦しみ、官民ともに疲労困憊いたしました。かてて加えて盗賊が道をささぎるというありさまですから、鬼神を使役する才能がありまして、どうすることもできません」

「先生のご手腕をもってすれば、日ならずして緒に就き、かならずご栄転なさいませう」

それからたずねて、

「して今度の勅命には期限がございますか」

「三年という期限つきなんです。河の工事がおわりますと、そのあと、陛下が役人を差し遣わされて、河の神に感謝のお祭りをなさいます」

話の途中で西門慶がテーブルを出すようにいつけると、安郎中、「小生、じつはまだ黄泰宇のところへあいさつにゆかなくてはならないんです」

「それでは、ほんの少々お待ちくださいまし。お供のかたに点心を差し上げますから」

やがてテーブルを出し、食台に酒のさかなを載せて来ましたが、それは全部で十六碗、すべてとろとろに煮た料理で、鶏の足、鷺鳥・家鴨・鮮魚、羊の頭・胃・肺・きも、さては粕漬の魚を入れた吸い物など。別に、純白の新しく柔らかな梗米の飯を銀縁の茶碗に盛り、その中に砂糖・榛の実、松の実、西瓜の仁が入れています。それから小さな金杯に燗酒。お供の衆にもつまみもの・点心・酒・肉を出しました。安郎中は三杯飲んだだけで、いとまを告げて立ち上がり、

「小生、日を改めましてまたご教示を仰ぎに上がります」

西門慶はねんごろに引き止めましたが、どうしてもきき入れませんので、表門まで送り、相手は轎に乗って帰ってゆきました。

西門慶は広間に引き返すと、冠帯をとって巾幘に換え、着物も獅子の補子のはいつた紫の毛織の直裾だけになり、温先生がお帰りになったかどうかきかせてみると、玳安が答えて、

「温先生はまだお帰りになりません。鄭春と黄四さんの家の来定が旦那さまをお迎えに来ていて、もうずいぶん待っております」

ということなので、西門慶はさっそく門を出て轎に乗り、従者を従え、一路、廊の鄭月児の家へと繰り込みます。廊の門をはいると、架児たちはみなかたえに身を隠し、当番の頭だけが両側にたたずんでいました。これもびくびくして、ひざまずいて迎えようとはいたしません。鄭春と来定がまず知らせにゆくと、応伯爵は李三を相手に双六をしておりましたが、西門慶が来たと聞いて、急いで片づけます。鄭愛月と愛香は頭に海鰐の毛皮の臥冠兒や、絹糸を鳥の巢型に編んだ杭州ふうの髪飾りや、翡翠の梅の花型の簪などを戴き、頭はつややかな髪に白い顔、すっかりめかし込んで、まるで花の精のよう。ふたりで門口まで出て来て迎えます。西門慶は轎をおりて客間にはいり、鳴り物は太鼓だけにしようにいつけました。まず李三と黄四がいさつし、それがおわると、鄭家のやりてが出て来てお目通りし、そのあとで、愛月たちふたりが燭台に插したろうそくのようなかつこうで叩頭いたします。正面に曲象をふたつ置いて、これに西門慶と応伯爵が腰をおろし、李智・黄四、鄭家の姉妹ふたりは横手に掛けます。玳安がかたわらから、

「轎はここに置いておきましょうか。それとも家にかえしまししょうか」

とたずねると、西門慶は兵卒も轎もみんなかえすようにいつけ、それから琴童に、

「お前、家へいって、温先生がお帰りになっていたら、栗毛の馬で迎えに来てい」

と命じます。琴童はハイと答えて帰ってゆきました。そこで伯爵、

「兄貴、いまごろやっとお越しとは、どうしたことなんです」

西門慶は工部の安郎中があいさつに見えたので、引き止めて食事を出したことをひととおり話しました。まもなく鄭春がお茶を持って来、愛香が一杯取り上げて、伯爵に差し出し、愛月が西門慶に差し出します。伯爵はやにわにそのほうに手をのばして、

「おや、まちがったわい。おれにくれたのかと思った」

すると愛月は、

「あたしがあんななかにあげたら、きょうのような仕合わせは回ってきませんよ」

「どうだい、この蓮葉は。てめえの亭主ばかり見てやがって、お客さんはそちのけだ」

愛月は笑って、

「きょうはあなたがお客さんになる順番じゃないわ」

お茶がおわって、茶碗と茶托を下げてゆくと、まもなく四人の「西廂」うたいの芸妓があらわれ、風にゆられる花の枝、ひらひらなびくぬいとり帯といったかつこうで、西門慶に叩頭いたします。西門慶はひとりひとりに名前をきき、そして黄四に、

「あとで唄をうたうときには、太鼓をたたただけにしてくれ、笛や銅鑼はよしにしてな」

「かしこまりました」

そのときやりてが出て来て、